

(3) 若宮大路周辺における商いにみる歴史的風致

鎌倉幕府滅亡後の鎌倉には、室町幕府によって東国支配の拠点「鎌倉府」が置かれていた。その長官である鎌倉公方足利氏は禅宗に帰依し、京都とは別の五山制度を確立させるなど社寺を積極的に保護していたが、15世紀半ばに鎌倉公方が鎌倉支配を放棄したことで、まちは衰退し、中世都市の活気は失われ、鎌倉は静かな農漁村へと変貌していった。

しかし、16世紀に入ると、鎌倉は武家政権発祥の聖地として重視されるようになり、戦国大名の後北条氏が鶴岡八幡宮の修造を行うとともに太平寺仏殿を円覚寺に移築して舍利殿を建立、17世紀には徳川家康が鶴岡八幡宮や建長寺など主要な社寺の復興を進めるなど、時の権力者や政権による支援などもあり、社寺も再び脚光を浴びるようになった。

そして江戸時代、泰平の世が続く中、鎌倉は、現在も知られる浄瑠璃、歌舞伎の代表的な演目の舞台として取り上げられるようになった。鎌倉時代の曾我兄弟あだうちの仇討ことぶきを題材とする「寿曾我対面」などで舞台となるほか、「仮名手本忠臣蔵」のように江戸幕府をはばかりて舞台を江戸から鎌倉へ置き換えて上演するものも多く、これらを通じて庶民に知られる場所となり、社寺も信仰の対象としてのみならず、江の島など景勝地の見物と結びついて遊山の対象となりはじめる。こうして鎌倉には江戸やその近郊から武士や町人など多くの遊山客が訪れることとなり、さらに賑わいを取り戻していくこととなる。



図2-13 曾我物語を題材とした錦絵

江戸時代にまとめられた鎌倉の地誌としては、徳川光圀が鎌倉を巡覧した際の記録である「鎌倉日記」や、それをもとに光圀の命で編纂された「新編鎌倉志」のほか、幕府の昌平坂しんぺんかまくらし学問所編纂の「新編相模国風土記稿」などが挙げられる。また、庶民が鎌倉に盛んに訪れるようになると、「鎌倉名所記」、「鎌倉絵図」など、名所めぐりに携帯するためのいわゆるガイドブックやガイドマップが盛んに出版されるようになった。

雪ノ下・段葛の項には、「八幡宮の前の道を雪の下といふ。茶屋、旅籠屋おほし。」とあり、挿絵からも多くの人々が通りを行き交い、往時の賑わいがうかがえる。

さらに近代に入ると、明治 21 年（1888 年）に東海道線大船駅が開業、同 22 年（1889 年）に横須賀線鎌倉駅が開業、同 35 年（1902 年）には江之島電気鉄道（現江ノ島電鉄）が開業するなど鉄道網の整備が進み、若宮大路の沿道には、観光客を対象とした宿泊、飲食、土産店が増え、観光地の賑わいを支える商業活動がさらに発展していった。

なお、中世鎌倉の時代から都市の基軸線とされていた若宮大路は、源頼朝が寿永元年（1182 年）に妻である北条政子の安産祈願のため造らせたものであり、昭和 10 年（1935 年）に史跡に指定された。

若宮大路の中央には、段葛と呼ばれる一段高い参道が築かれており、当初は鶴岡八幡宮から鎌倉海岸に程近い一の鳥居までであったようだが、時代の流れとともに一部は平坦地となった。大正 6 年（1917 年）には段葛の現存部分が鶴岡八幡宮境内に改めて編入され、昭和 42 年（1967 年）、史跡若宮大路とは別に、史跡鶴岡八幡宮境内の一部として史跡に指定された。

若宮大路と鶴岡八幡宮を中心としたこの地域は、栄華を極めた鎌倉時代から現代に至るまでの 800 有余年の時の流れをありありと想像することができる代表的な場所であり、段葛を挟んで両側に商店が並ぶ風景は鎌倉独特のものである。そして、若宮大路に点在する昭和初期の建物を活用した商店は、こうした時代の流れの中で観光地として発展した鎌倉の姿を想起させる証人である。

特に、若宮大路の中ほどに位置する湯浅物産館と三河屋本店はその代表的な例といえる。

湯浅物産館は、明治 30 年（1897 年）に貝細工の製造加工・卸売りの店舗として創業し、現在の建物は昭和 11 年（1936 年）11 月に建築されたものである。

建築年の根拠は棟札と座机の存在である。棟札は桁行の中央、正面から 3 本目の棟束にむなづかくぎ打ちされており、その裏面に「上棟 昭和十一年七月十日 湯浅新三郎住宅」と墨書



写真2-77 若宮大路(明治時代)



写真2-78 若宮大路
(昭和 34 年(1959 年))



写真2-79 若宮大路



写真2-80 湯浅物産館

がある。また、座机はその甲板裏面に「昭和十一年十一月十五日 祝新築出入職一同」と記されている。これらにより、この建物が昭和11年（1936年）7月に上棟し、同年11月に竣工したことが分かる。加えて、縮尺50分の1で一、二階の平面図を和紙に墨入れして描いた「店舗新築工事設計図」が残されており、創建時の姿を知ることができる。

横浜の貿易商社を模したという外観は、木造の建物の前に装飾を施した「看板建築」と呼ばれる形式をとっており、道路に広く開放された店舗空間や店舗中央に設けられたトップライトなどの建物内部も、往時の建築的特徴をよく示している。



写真2-81 店舗天井・吹抜

現在は、建物内部の改修工事が行われ、柱の少ない広い空間が活かされた複合商業施設となっているが、多くの人々が行き交う若宮大路において、観光客を対象とした商業が営まれているという点は、往時から変わらぬものである。また、特徴的な外観だけではなく、職人によって丁寧に施された建物内部の装飾は、今も昔も訪れた観光客の目を引いて飽きさせない造りとなっている。

湯浅物産館に近接する三河屋本店は、明治33年（1900年）創業の酒店で、伝統的な出桁造りの店構えが、若宮大路の沿道でひととき目を引く存在である。この建物は、この地で酒店を営んでいた竹内福蔵たけうちふくぞうが、関東大震災で倒壊した建物に代えて昭和2年（1927年）に建てたものであり、建設年の根拠は、棟木の墨書および「昭和二年 新築工事控 式月より」と表書きされた和綴の帳面の存在である。墨書は、住宅棟の南北に通る棟木わたじの下端部に北側から「上棟昭和二年六月二日 竹内福蔵」と記されたものであり、「新築工事控」は、昭和2年（1927年）2月から10月までの各月の工事経費を項目別に細かに記したものである。この二つの史料により、三河屋酒店が昭和2年（1927年）2月に起工、6月に上棟し、同年10月に竣工したことが分かる。



写真2-82 三河屋本店

伝統的な出桁造りの母屋、蔵、そして現在も使われているトロッコ及びトロッコ用レールなど、戦前の商店の姿がそろって使われている三河屋本店は、建築史的・民俗史的に見ても、鎌倉の戦前の商店建築を代表する貴重な建物といえる。

鶴岡八幡宮への参拝客などで賑わう若宮大路において、昭和初期の風情を湛えるこの建物は、行き交う人々の目を



写真2-83 トロッコ用レール

引き、足を止めさせ、建物自体が商店の賑わいを支えているともいえ、トロッコの軌道や建物内部を興味深げに眺める人、土産物として地酒や地ビールなどを購入する人などが年間を通してこの店を訪れている。

このように多くの観光客が訪れる鎌倉駅東口から鶴岡八幡宮に至る地域には、参道である若宮大路を基軸として、格子状に路地が交わり、市景観重要建築物等に指定されている建物などを含め、面的な広がりをもって多くの商店が軒を連ね、古くから観光地として発展してきた鎌倉の商業活動の歴史を今に伝えている。

また、若宮大路をはじめ、これとほぼ平行に走る小町通りなどにも、観光客を対象とした土産物店・飲食店が多く立ち並び、年間を通じて賑わいをみせており、地域で営まれている商業活動は、まさに活力を与え、首都圏屈指の一大観光都市として年間約 2,000 万人もの人々が訪れる鎌倉を支えている。

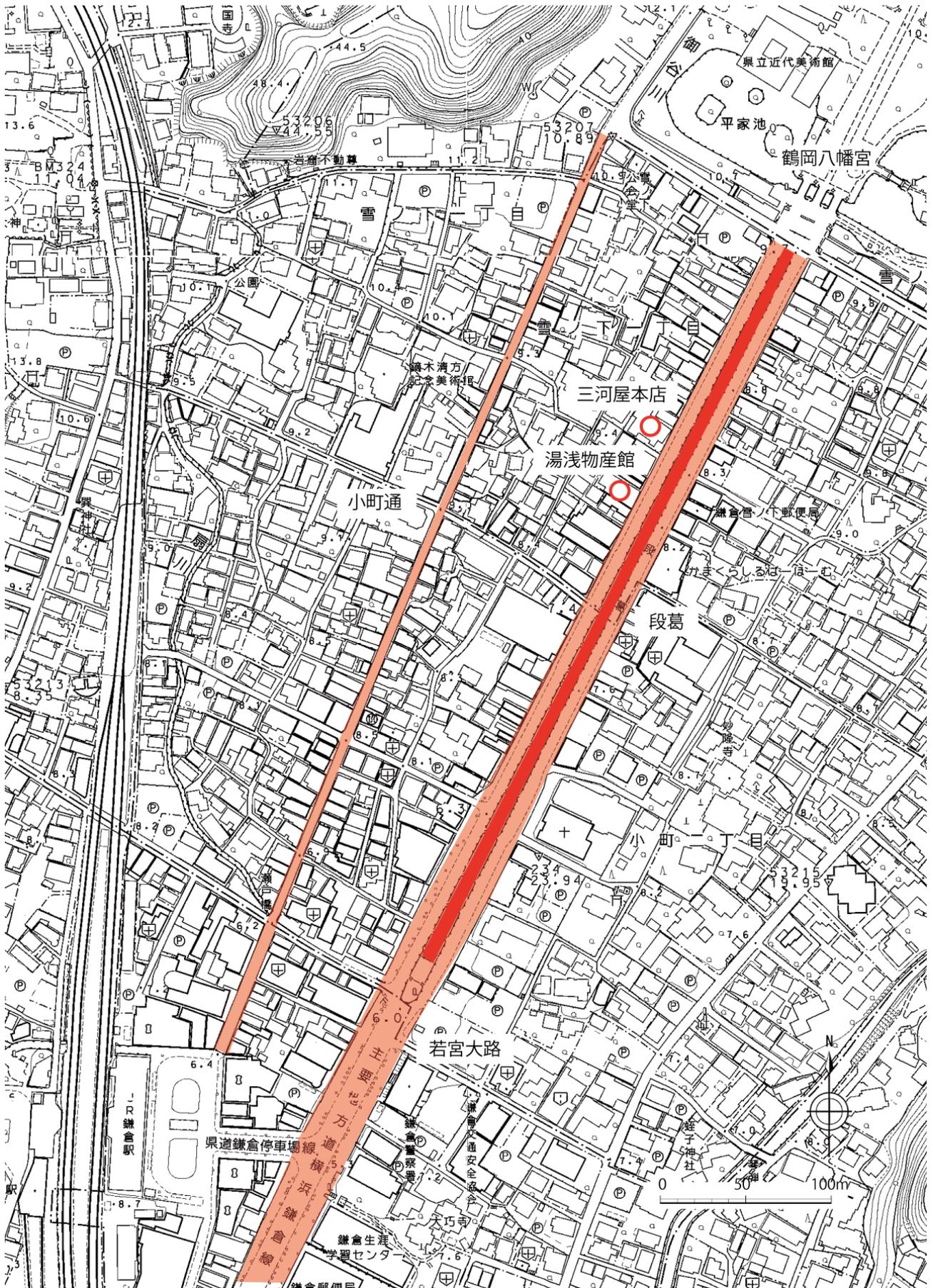


図2-16 若宮大路周辺の位置図

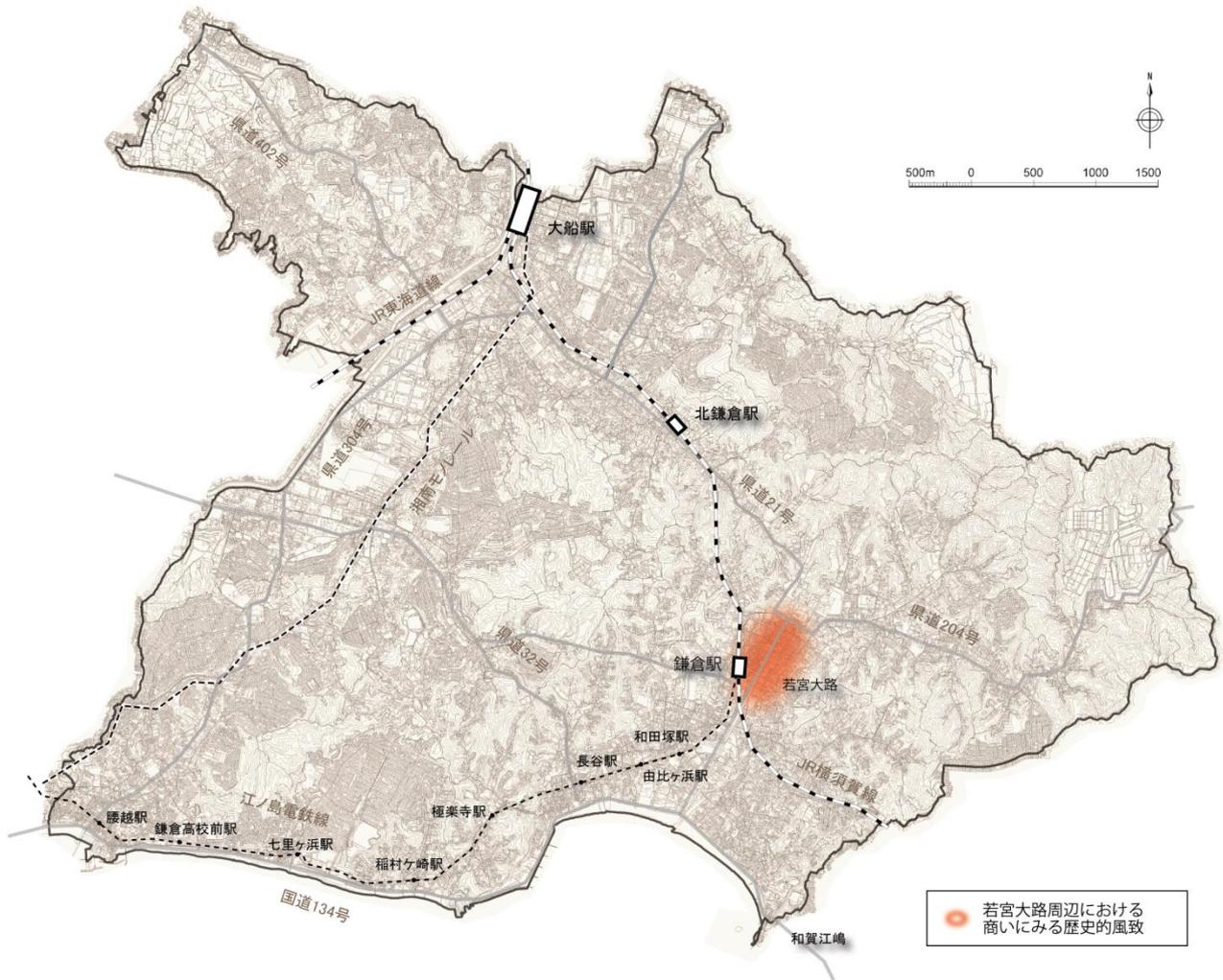


図2-17 若宮大路周辺における商いにおける歴史的風致の範囲